

新除草・調節剤

アイピックス[®]粒剤

DPA・DCMU 除草剤

(取扱メーカー) 石原産業株式会社

対象作物: 桑園(春切後・夏切後)。

成分・作用特性: 本剤は、2,2-ジクロロプロピオン酸ナトリウム〔DPA〕を10%と、3-(3,4-ジクロロフェニル)-1,1-ジメチルウレア〔DCMU〕を3%含有する粒剤である。

DPAは、イネ科雑草の根部・茎葉部から吸収され、雑草体内を移行し、パントテン酸の生成阻害により枯死させる。DCMUは、雑草の発芽後、根部から吸収されて茎葉に集積し、同化作用を抑制して枯死させる。

本剤の特長は、スズメノテッポウ・メヒシバ・スズメノカタビラ・ハコベ・アカザなど畑地一年生イネ科および広葉雑草全般に有効であり、桑に対する安全性は高い。

毒性: 急性経口毒性は、ラットLD₅₀ (mg/kg)で、DPAは4,600、DCMUは3,400と低く、普通物である。魚毒性はBランクであり、人畜に対しては、安全性が高い。

使用法: 雑草の発生前に10アール当り春切後は3~5 kg, 夏切後は3 kgを、土壌全面に均一に散布する。

適用土壌: 全土壌(砂質土壌は除く)。

使用上の注意: ①本剤は、雑草発生後の処理では効果が劣るので、必ず雑草の発生前(遅くとも雑草発生始期まで)に散布する。②農作物に近接しているところでは、飛散・流入しないように注意する。③本剤は粒剤であるから、散布後、異常乾燥が続くような場合は効果が劣る

ので、土壌が適度に湿っているときに散布する。

夏期に異常高温が続くようなとき、また砂質土壌など水はけのよい圃場や雨量の多い時期には、薬害の危険があるので使用をさける。

デルカット[®]乳剤

オキサジアゾン・ブタクロール除草剤

(取扱メーカー) 日産化学工業株式会社

北興化学工業株式会社

対象作物: 水稻(稚苗移植・成苗移植)。

成分: 本剤は、5-ターシャリーブチル-3-(2,4-ジクロル-5-イソプロポキシフェニル)-1,3,4-オキサジアゾーリン〔オキサジアゾン〕を8%, 2-クロル-2,6'-ジメチル-N-(ブトキシメチル)アセトアニリド〔ブタクロール〕を12%含有する赤褐色透明可乳化油状液体である。

特長: ①本剤は、オキサジアゾンとブタクロールの混合乳剤であり、容器のまま、きわめて簡単に散布できる。②ノビエなど各種一年生雑草およびマツバイに卓効を示し、ホタルイ・ミズガヤツリ・ヘラオモダカなどの問題多年生雑草にも有効である。③稚苗・中苗などの機械移植栽培にも安心して使用でき、温度に左右されず、安全でよく効く。④雑草発生前の代かき時に処理するので、安定した高い効果が田植前から長期間持続する。⑤散布機で、より安全で省力的な散布もできる。⑥軽便なサンブラックビン入りのため、散布しやすく、使用後の空ビンは安全に焼却できる。

毒性: 普通物で、魚毒性はB類である。

新除草・調節剤

使用法：①植代直後処理は、植代かき後、代かき水が濁っている時に、10アール当り500ccを原液のまま均一に散布する（散布時の水深は3～5cm）。②荒代かき後、植代かき前に10アール当り500ccを原液のまま土壌に均一に散布し、混和する。混和深は2～3cm（混和時の水深は3～5cm）とする。

適用地帯：全域の普通期栽培地帯（暖地の早期栽培地帯を含む）。

適用土壌：砂壤土～埴土（減水深2cm／日以下）。

使用上の注意：①植代かき直後処理の場合は、植代かき後、代かき水が濁っている時に散布する。この場合、大型水田等では、散布後整地板をかけるとよい。②荒代かきをしてから植代か

き前に本剤を散布する場合は、十分湛水（5cm位）してから散布し、植代かきを浅く行なう。③散布後落水したり、数日以上も田面露出すると、効果がおちるので湛水を保ち、掛け流しはしない。④徒長軟弱苗の場合や、砂壤土、極端な漏水田および著しいガス発生田での使用はさける。⑤田面の均平をよくし、田植後しばらくは浅水にして、苗が水没しないように水管理をする。深水は、葉鞘褐変、生育抑制を出すことがあるので注意すること。⑥強風時には、散布しないこと。

追記：なお、この薬剤は、適用地帯として温暖地東部および西部の早期栽培地帯を、適用雑草として、ホタルイ・ミズガヤツリ・ヘラオモダカの実用性が確認されている。

植調協会だより

◎ 会議開催日程のお知らせ

- ・昭和54年度秋冬作芝生関係除草剤・生育調節剤試験成績検討会

編集後記

陽性型梅雨なのか、微雨らしい雨はなく、降ったかと思えば雷鳴を伴う豪雨で、微雨らしさを感じさせない。そのためか、雑草の生育はよく、ちょっと油断していると、畑が一面雑草に覆われ、たちまち蚊や病害虫の巣と化してしまう。近頃では、卓効のある茎葉処理剤で簡単に除草できるが、その前に土壌処理剤を散布し、雑草の発芽を抑える方が、薬剤費も少なく経済的であり、省エネに協力することにもなろう。

日時：昭和55年7月10～11日

場所：程ヶ谷カントリー倶楽部（神奈川県横浜
市旭区上川井町 045-921-0115）

◎ 人事異動

昭和55年5月31日付

依願退職 事務局総務部嘱託 奥野太郎

財団法人 日本植物調節剤研究協会
東京都港区虎ノ門一丁目17番1号
電話 東京(03)502-4188(代)

昭和55年6月発行

植調第14巻第3号

¥250（送料140）

編集人 日本植物調節剤研究協会専務理事 吉沢長人
発行人 植調編集印刷事務所 広田伸七

東京都港区愛宕1-2-2 全国農村教育協会内
発行所 植調編集印刷事務所
電話 東京(03)436-3388番